これは東日本大震災の予言書なのか——

驚愕入手

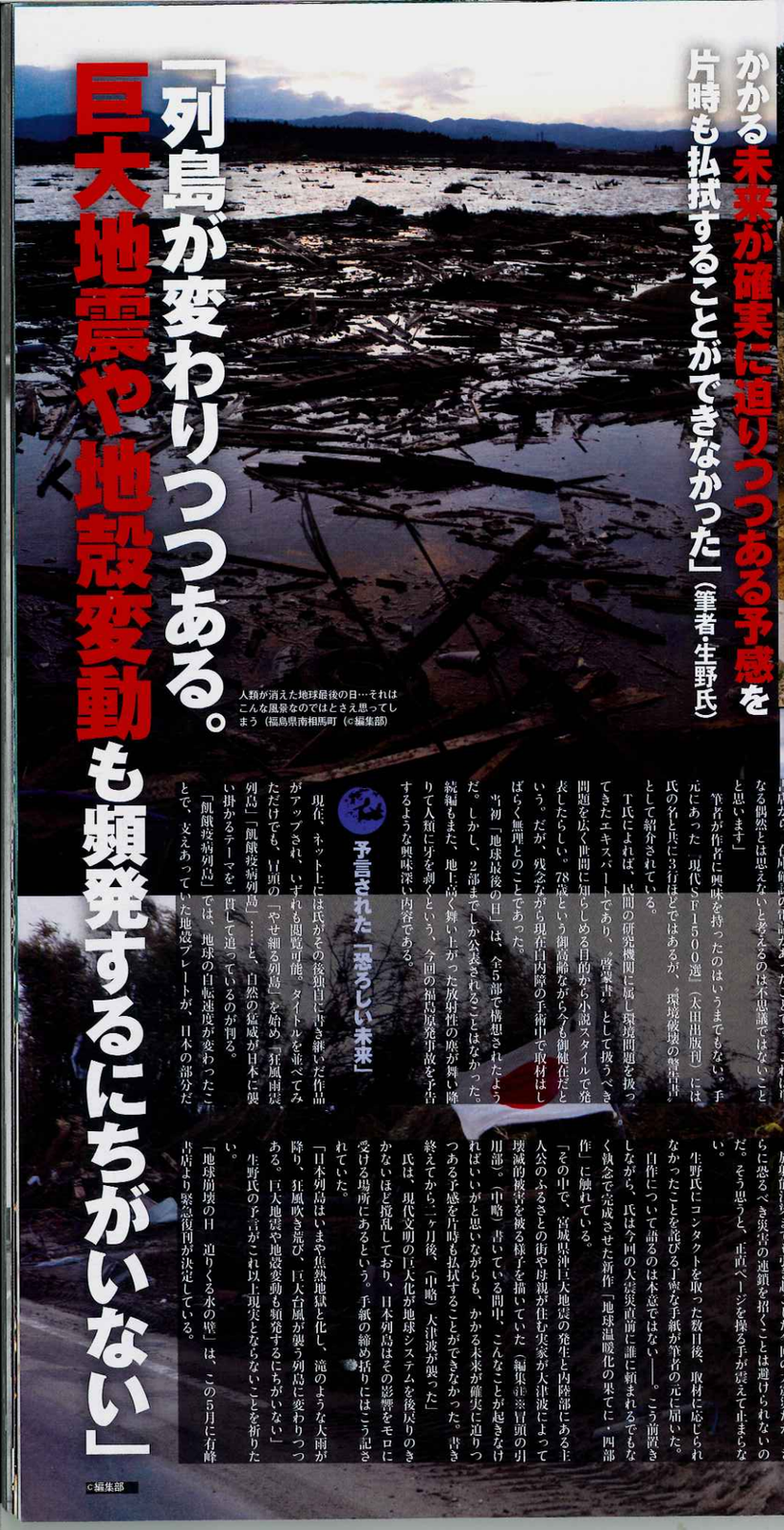
3・11に先駆けること1年前に発表されたその小説には、まるで見てきたかのような三陸海岸に襲いかかる大津波の描写があった

絶版から20年以上経つ一冊の本に、震災の1週間前から立て続けに問い合わせが入った

「書いている間中、こんなことが起きなければいいがと思いながらも、かかる未来が確実に迫りつつある予感を片時も払拭することができなかった」（筆者・生野氏）

「列島が変わりつつある。巨大地震や地殻変動も頻発するにちがいない」

取材・文／井戸高&本誌特別取材班



人類が消えた地球最後の日…それはこんな風景なのではとさえ思ってしまう（福島県南相馬町（©編集部）

死者約3万人。身元が判明した遺体の多くは、土葬された（宮城県石巻市（©釣崎清隆）

あらゆるモノを奪い去った巨大津波。誰がこのような惨劇を想像しただろうか（宮城県名取市近郊（©編集部）

津波被害で甚大な被害を受けた仙台市若林区荒浜。すべては無惨に破壊された（©釣崎清隆）

この国家的大災害に自衛隊員らによる必死の捜索、救援がなされている（仙台市若林区荒浜（©釣崎清隆）

離ればなれになった家族だろうか。子どもの写真がガレキの側に置かれていた（宮城県南三陸町（©編集部）

生野久男著『地球崩壊の日 迫りくる水の壁』（有峰書店刊）。これが問題の書だ。

想像を遥かに超える未曾有の大災害を前にして人は神頼みに走るのか——

今回の震災では予言、予知の類の噂話をよく耳にする。それらの真偽をいちいち検証するのも愚かしい。しかし気になるのが当然だ。

実はここにもひとつ、予言めいた内容の本がある。「地球崩壊の日」と題されたその内容は驚くべきものだった。

今回の震災がある作家に見えていた

彼は宮城県沖が震源だと耳にして部屋を出た（中略）

一斉に潮が引いた。海面急上昇によって海中に没していた岸壁や防波堤などが顔を出した。以前の港湾施設が姿を現した。

前の海に戻った。と思ったつぎの瞬間、轟音とともに、巨大な波が白い波頭の鎌首を立てて押し寄せてきた。（中略）。地震で外壁や瓦が落ちた建物や地盤が揺らぎ基礎が穀んだ建造物が勢いよく押し寄せる大水塊になき倒されていった（中略）。転覆した船舶が流され、建造物に激しくぶつかる。なかには湾に注いでいる河川を遡上する津波に流され、橋梁や鉄橋に激突した。これらを損傷し、船も木端微塵となった（中略）。あっという間の出来事だった」

これは、この3月に起きた東日本大震災の取材記事の一節ではない。ある無名作家が昨年ネット（kmokopress.com）上に発表した作品「やせ細る列島」の一節である。

作者・生野久男氏の名を知ったきっかけは、旧知の間柄である有峰書店新社の社長・T氏から届いた一通の6冊子小包だった。

人っていたのは「地球崩壊の日」という黒い書籍だった。興味を覚えると1989年に発行され、現在は絶版である。

舞台は地球温暖化で農業生産が危機に瀕した近未来。人工的な火山噴火で成層圏にバリアを作り気温低下を図る計画が実行されるが、連鎖的に海底地震が起き、南極の氷壁が崩壊。大津波が牙を剥く。クライマックスに描かれるのは水没する日本の姿だ。黒い波が巨大堤防を易々と越え、人も街も飲み込んでゆく。ネット画像やテレビで映し出される今回の大地震の有様が脳裏に甦り、背筋が凍った。

「そんな内容もさることながら、目を引いたのは本と共に封入された、T氏本人による一葉の手紙だ。

「摩訶不思議なことは、この本の問い合わせが以前はまったくといっていいほどなかったのですが、3月3日に大阪の書店、3月4日に広島の書店、3月7日に福岡の書店から、在庫確認の電話があったことです。これは単なる偶然とは思えないと考えるのは不思議ではないことと思います」

筆者が作者に興味を持ったのはいうまでもない。手元にあった「現代SF1500選」（太田出版刊）には氏の名と共に3行ほどではあるが、『環境破壊の警告書』として紹介されている。

T氏によれば、民間の研究機関に属し環境問題を扱ってきたエキスパートであり、啓蒙書として扱うべき問題を広く世間に知らしめる目的から小説スタイルで発表したらしい。78歳という御高齢ながら今も御健在だという。だが、残念ながら現在自閉症の手術中で取材はしばらく無理とのことであった。

当初「地球最後の日」は、全5部で構想されたようだ。しかし、2部までしか公表されることはなかった。続編もまた、地上高く舞い上がった放射性の塵が舞い降りて人類に牙を剥くという、今回の福島原発事故を予告するような興味深い内容である。

予言された「恐ろしい未来」

現在、ネット上には氏がその後独自に書き紡いだ作品がアップされ、いずれも閲覧可能。タイトルを並べてみただけでも、冒頭の「やせ細る列島」を始め、狂風雨震、列島」「飢餓疫病列島」……と、自然の猛威が日本に襲い掛かるテーマを、貫して追っているのが判る。

「飢餓疫病列島」では、地球の自転速度が変わったことで、支えあっていた地殻プレートが、日本の部分だけ破片として独立し、マントルに沈没を始める。また、「忍び寄る殺人氷塊」では、化学物質で変異したウイルスが溶けこんだ北極の氷床が温暖化で崩壊、日本を浸食する。通低するのは、天変地異は一つとしてそれだけで起こるものではないという作者の自然観だ。全ては、自然をコントロールできるという人間の傲慢の所産であり、どれだけ情報化が進もうと、過去のデータベースが充実しようと、それを駆使すべき人類が明け暮れるのは、現実には「想定」の応酬というパワーゲームであり、為政者も科学者も目先の権益を追うばかりに、防げたかもしれないカタストロフが何百万という人命を奪ってゆく。

作者は「地球崩壊の日」の中で次のように言う。

「自然はひとつのシステムです。このシステムは、いろいろな要因が微妙に作用しあってバランスが保たれているものです。（中略）バランスを崩した自然システムから、どのようなアウトプットがでるか簡単に予測できません」

この言葉は、一旦タガが外れた自然が、次々と思いがけない形で牙を剥くことを示唆している。

放射能汚染までも引き起こした今回の大震災だが、さらに恐るべき災害の連鎖を招くことは避けられないのだ。そう思うと、正直ページを操る手が震えて止まらない。

生野氏にコンタクトを取った数日後、取材に応じられなかったことを記した丁寧な手紙が筆者の元に届いた。

自作について語るのは本意ではない——。こう前置きしながら、氏は今回の大震災直前に誰に頼まれるでもなく執念で完成させた新作「地球温暖化の果てに・四部作」に触れている。

「その中で、宮城県沖巨大地震の発生と内陸部にある主人公のふるさとの街や母親が住む実家が大津波によって壊滅的の被害を被る様子を描いていた（編集注※冒頭の引用部）。（中略）書いている間中、こんなことが起きなければいいがと思いながらも、かかる未来が確実に迫りつつある予感を片時も払拭することができなかった。書き終えてから二ヶ月後、（中略）大津波が襲った」

氏は、現代文明の巨大化が地球システムを後戻りのきかないほど撹乱しており、日本列島はその影響をモロに受ける場所にあるという。手紙の締め括りにはこう記されていた。

「日本列島はいまや焦熱地獄と化し、滝のような大雨が降り、狂風吹き荒び、巨大竜巻が襲う列島に変わりつつある。巨大地震や地殻変動も頻発するにちがいない」

生野氏の予言がこれ以上現実とならないことを祈りたい。

「地球崩壊の日　迫りくる水の壁」は、この5月に有峰書店より緊急復刊が決定している。

©編集部